

2025年12月7日 第二礼拝 アドベントⅡ ～平和の灯～

説教題『善き力にわれ囲まれ』イザヤ書9章1～5節、ルカ福音書2章8～14節

主任牧師 加藤 誠

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた…その名は、『驚くべき指導者、力ある者、永遠の父、平和の君』と唱えられる。」(イザヤ書9章5節)

「いと高きところには栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカ2章14節)

今年には戦後 80 年のクリスマスということで「世界の平和を祈る」というテーマを与えられました。朝の祈祷会のメンバーが考えてくださったものですが、朝の祈祷会に集っておられる 80 年前の戦争を体験された方々の祈りがそこに込められていると受け取りました。「あの愚かな戦争を繰り返さないために、聖書の愛と正義に基づいて平和をつくりだす人を！」。あけぼの幼稚園創立に際して、初代牧師の大谷賢二先生をはじめ、戦争を経験した教会はそう祈りを込めました。その意味で「世界の平和を祈ること」は大井教会の宣教の大切な使命の一つです。この宣教の使命のバトンを受けている私たちが、「誰かほかの人の祈り」ではなく「自分の祈り」として次の世代にバトンをつなげていく一人ひとりでありたいと願います。

旧約聖書の時代、イザヤは救い主は「平和の君」であると預言しました。そしてイエス・キリストが飼い葉桶に誕生した時、天使たちは「いと高きところに栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」と賛美しました。この救い主を通して、地の上に平和が実現すると天使たちは歌ったのです。「いと高き」とは英語の **highest**。最も一番高い天、天の天のさらに天という意味です。ここで大切なことは「天の栄光／神への賛美」と「地の平和」は切り離せないということです。地が平和でなければ、天の栄光／神への賛美はない。地に一人でも不条理な悲しみを強いられて苦しむ人がいるなら、天の栄光／神への賛美はないということです。また「御心に適う人」とはどういう人でしょうか。この言葉は「神の思いが向けられている人」という意味です。それは「神の期待に応えて、神の御心を実行している人」でしょうか。そういう人には平和があり、神の期待に応えられていない人には平和がないということでしょうか。

神の思いがどのような人に向けられているのか。それはイエス・キリストが教えてくださったことです。たとえば、人々が「こいつは石打ちにすべきだ」と石を投げつけようとした女性の傍らにあって主イエスは「もう罪を犯すことがないように」と語りかけられました。「あなたに神の思いは向けられ、あなたは神の愛と赦しの中に覚えられている。その自分を大切に生きなさい」ということです。また 38 年間病気のために寝たきりで、癒されることも生きることも諦めていた男に、主イエスは「治りたいのか？」と、男の心に火をつけるような言葉をぶつけながら「床を担いで歩きなさい」と命じられました。それは「あなたに神の思いは向けられ、神の恵みがあなたと

共にある。その恵みを受け取って歩みなさい」ということです。そのように群れから取り残されてしまったような一匹の羊にも神の思いは大切に向けられていることを主イエスは教えてくださいました。いや、それだけではありません。その主イエスに憎悪と殺意を向ける人たちのことも最後まで神の赦しを祈られました。彼らも「神の思いが向けられている一人」だからです。だとするなら「神の御心に適う人」とは、すべての私たちのことではないでしょうか。そのすべての私たちが神の愛と恵みを受けて平和を生きることができるよう、主イエスは「平和の福音」を告げ知らせ、十字架の道を歩まれたのです。そして、弟子たちにも「平和の福音」の備えを足に履いて（エフェソ 6：15）世界の人々の中に出ていきなさいと命じられたのでした。

ただ、教会が「主イエスの平和の福音」を語り、行動していくことは大変な勇気と深い覚悟が求められることです。今から 80 年前、ミッションスクールが聖書の平和を教えると「けしからん学校だ」と非難を浴び、電車の中で英語の本を開いていると「非国民！」と言われて殴られたそうです。「戦争は人を憎むことを教える。人間を精神的にも肉体的にも滅ぼすことをこの目で見てきました」と、戦争の時代を生きた方たちは証言しています。今は平和に見える。けれど世間の空気はあっという間に変わる。大多数の人は、教会の私たちも含めて、自分がかわいい。世論が戦争に傾き始めるとみんな口をつぐみ、世の中は戦争色に染まる。そういう風潮の中で、教会がどこまで「平和の福音」を語り続けることが出来るのか…を問われるのです。

今、映画『ボンヘッファー ヒトラーを暗殺しようとした牧師』が上映されています。ボンヘッファー牧師はヒトラーへの抵抗運動のゆえに、1945 年に 39 歳の若さで絞首刑に処されました。教会の指導者たちが次々にヒトラー賛美になびき、ユダヤ人虐殺にも口をつぐむ中で、ボンヘッファーは「キリストのみを主と告白する教会」の指導者として抵抗運動の先頭に立ちます。例えばナチスは「純粋なドイツ民族こそが理想的なアーリア人」と主張し、聖書の十戒に「ヒトラー総督への忠誠」と「アーリア人の純血」を加えて「十二戒」にした時、ボンヘッファーは主イエスの御言葉に立ち「人を神として賛美することはできないし、ユダヤ人は私たちキリスト者の大切な友である」と言い抜きました。映画では、そのようにしてナチスを前に決然と御言葉を語る一方で、ひとり獄中でうずくまり主の名を呼び求めて祈る、強さと弱さ両方を抱えた人間ボンヘッファーが描かれていました。この世界で「平和の福音」を語り抜くことは容易ではないのです。それゆえボンヘッファーは獄中において「善き力にわれ囲まれ」という詩を残しました。私たちは自分たちの勇気や力で「平和の福音」を歩み通すことはできない。私たちに先立つ主の善き力。人間の深い罪がこの世界をどれほど覆っても変わらない善き力。私たちを照らし続ける恵みと平和の灯。私たちを囲むこの善き力に守られて、主イエスに従う信仰を歩む教会でありますように。